

小説
・
具志頭親方
・
蔡溫

平安名尚

青山ライフ出版

◎ 目次

第一章	カンダ葉	(芽生え)	
第二章	出逢い		35
第三章	真如姑樽	まにくだる	71
第四章	首里城完成		
第五章	すつたもんだの請封		
第六章	咲くやこの花		
第七章	評価騒動	はんが一	
第八章	支えあう仲間たち		
第九章	御内原		
第十章	赤木赤虫ぬ蝶	はべる	
第十一章	なて飛びば	…	
	改修・羽地大川		
319	255	199	
		171	103
			137
			5

第一章 カンダ葉（芽生え）

一

一六九二年、当時那覇といえは島であった。

東に安里川、西に国場川、南に久茂地川に囲まれた浮島と呼ばれる島であった。アカチラ（地名）は安里川の西側の河口付近で、今の若狭町の東支那海に面した小さな珊瑚の砂場であった。

夜明けのアカチラで裾を揺めて、魚釣りをしている三人の童子達がいた。グルクン（タカサゴ・

スズキに似た魚）を狙つて釣りをする童子達の二人は男の子で、名前を蒲戸（蔡温の童名で十歳）と他妻（玩塞の童名で十二歳）と云つた。二人とも清人の髪形を真似た辯髪（べんぱつ）だった。もう一人は、三つ編みをした愛らしい女の子で思戸金（八歳）である。この特異な髪型をした三人は久米邑（久米人は一四世紀末に福建省から帰化した人々である）の童子達であった。久米邑の大人達は、彼らの先祖が先進国で強大な大陸人であることを、童子達に教唆する風習があつての髪型だったのである。

初春はグルクンの時期である。アカチラの砂州でグルクン釣りをしている三人は投げ釣りをして

いる。絹糸の先端に重石をつけて、くるくると頭上で円を描くように振り回し、遠心力で勢いよく遠方に放り投げる手法である。後は木薙(きかぶ)に絹糸を巻き上げながら重しの先端につけた餌に当たりを待つ。当たりがないと、餌の沙蚕(さかい)か子蟹(こに

が千切れ落ちない限り同じことを繰り返す。遠くまで投げ飛ばせない思戸金の釣り糸は蒲戸の仕事だった。今日のアカチラは満ち潮と相まって面白いほどよくグルクンが釣れたのであった。地黒の他妻は元々、渡地邑(わたぢ)（国場川河口の東側辺り）の船乗りの息子で、今は久米邑に住んでいた。どこで何を釣るかを決めるのは他妻だった。蒲戸と思戸金は竹竿と餌箱を持って、他妻の指定した場所へ指定した時刻に行く。早朝でのアカチラで一刻ばかり釣りをして大漁だつた三人は、夕方から漫湖(まんこ)（国場川と饒波川の合流地の河口）の東岸で、明朝の餌を採る約束であった。

蒲戸と思戸金が待ち合わせの漫湖東岸の赤畠(あかばた)に来たのが午後の丑刻。漫湖の一部に浅瀬があつて、弥生の干潮時に限つて対岸まで歩くことができる。既に小禄の加真(おろく)（豊成亥の童名）と、加真の仲間である松と鍋が浅瀬を渡つて赤畠に来ており、そこに他妻が混じつて、小石を退けて沙蚕を探している。その姿を見つけた二人は袂(まく)を捲り、素足で駆け出した。

二人は漫湖の泥に足を掬われながら、釣り仲間の四人に合流するや、餌の子蟹(こがに)や沙蚕(さかい)を無言で掴んでいた。掴んだ餌は干からびないように、泥も一緒に自家製の箱にすばやく拾い入れている。思戸金も懸命に捜している、といつても立ちつくしている方が多いから、なかなか見つからない。蒲

戸は沙蚕を時々無言で思戸金に分け与えていた。

この時期、海水はまだ冷たい。しかし、凍てついて耐えられないほどの冷たさでないのが、沖縄の冬である。広い干潟で黙々と餌を採る童子達のすぐ近くに、渡り鳥の鳴しづきが幾十羽と、至る所で群れをなして長閑に餌を啄ばんでいる。漫湖の東西の岸渕に広がるマンゴロープの林と、干潟と渡り鳥と童子達。蒲戸たちのほかにも石ころをどけて、下に隠れている子蟹や沙蚕を夢中に拾う数人の童子達がいた。漫湖は如何にも南国風情の漂う場所だった。

半刻ばかり経つた。

潮が満ちだしたので、蒲戸とは遠戚に当たる小禄の加真の連れは、早めに引き上げていた。他婁とも別れを告げて、蒲戸と思戸金は、餌を充分捕つて満足気に漫湖を出て家路へと、日暮れの赤畠から牧志に通じる漫湖のぬかるんだ淵辺を通り、二人は河口の島崎路（今のバスターミナル裏路）に上がった時である。

蒲戸より二歳上の兄・次良（蔡淵の童名）と二人は鉢合わせた。吃驚したように次良が云う。

「おい！ 遅いじゃないか」

「うん」

蒲戸は素直に詫びた。そこへ次良が近づき、

「どれどれ、見せてみな」

左手に竹竿を持ち、右手は竹籠で編んだ餌箱で塞がつていた蒲戸は、

「こんなもん」

と、腰籠にある魚がよく見えるように腰を振った。日焼けした黒い顔に白い歯を浮かべて満面でいる。

「おお、凄いじゃないか。これは、これは」

腰籠を覗き込んだ次良は収穫がいいのに吃驚して云う。一緒に居る思戸金に、

「思戸金も釣ったの？」

彼女に微笑んで聞くと、

「うん、ちょっとだけ……」

あどけない顔で誇らしげに腰を振つて見せる。腰を振ると垂らした長い三つ編み髪が背中で泳いでいる。このところ思戸金はどこへ行くにも蒲戸について一日中遊び廻っていた。しかも、思戸金は隣家でこの葵兄弟とは遠戚でもあつた。

「まあ、こんな日もあるさ」

蒲戸は胸を張り、泥の着いた顔のままで頭を振つて、アヒラージュ（辯髪を子供がしている場合の呼び名）を振り直すと、着古した襦袢を捌めた姿で、意気揚々と先を歩き始めた。次良は弟の帰りが遅いので迎えに来て鉢合わせたのだが、すぐに会話が途切れていった。いつものことである。

蒲戸は次良に、

（釣りばかりしている）

と云われるのが嫌いで黙々と先を歩いていた。次良も、

（釣りばかりしていて、勉強もしろよ……）

喉まで出掛けた言葉を呑み込んで後を追つていた。三人は暗くなりかけた島崎路を黙つて歩いている。足早に先を歩いていた蒲戸は、近くの泉崎橋を渡るのを避けて見榮橋に向かう。泉崎橋界隈は暗くなると不良が多い。そこは商都らしく薩摩人や唐人が日暮れの街を往き通つていた。古往今來いすこでも同じ現象だが、人々が多く集まるところには不良と呼ばれる喧嘩好きの猛者も集つてくる。そこで喧嘩をふっかけられたら、気つ風のいい蒲戸は売られた喧嘩を買つてしまふ。つい先日の喧嘩で負つたおでこの傷もまだ鬱血うつけつしている。そのとき、籠の魚をばつたくられた悔しさが残る蒲戸は、泉崎橋を避け、遠廻りになる見榮橋へと、意識して細く暗い農道を選んで歩いて行くのだった。

周りは真和志の塙田が拡がり灯りがない。夕暮れの久茂地川沿いの農道を歩く三人に、夜風が頬に突き刺さつてくる。蒲戸に放れないようについて歩く思戸金、その後を黙々と次良がついている。三人はひたすら無言のまま歩き続けていた。

三人が木造りの見榮橋を渡るともう、浮島である。浮島には那覇四邑が東西に分かれて賑わつて

いる。その真ん中の幾分、丘陵となつたところが久米邑だつた。百戸ぐらいで、四百人位が居住していた。三人が渡る見榮橋の前方には首里と那覇を結ぶ長虹堤（ながこうてい）が艤に見えている。見榮橋を渡ると道幅が広くなつて久米邑大道である。道幅が広くなると、次良は後から駆け寄り腰籠の収穫を再び覗いて云う。

「あれあれ、グルクンもあるね」

「うん、グルクンだらけ……」

「そうか、岩場だけじゃなく、砂場でも釣りをしたんだ。母さんに、グルクンの油揚げをご馳走に戴こうかな」

蒲戸は、兄が面長の顔を更に長くして覗いているのを知りながら、振り向かずに威張つた口調で歩きながら次良に告げるのだつた。

「グルクンはね、母さんが釣つたんじゃないよ。釣つたのは俺。料理してくれるのが母さんなんだからね」

「それはそうだろう。釣つたのは蒲戸。料理してくれるのが母さん。俺、グルクンの油揚げが大好きなんだ」

次良はすまして云う。

「そんなら、少しぐらい感謝しろよ、俺にね」

蒲戸は釣りが単なる遊びでないこと、つまり、食材を仕入れてることを強調して云うのだった。蒲戸は大漁だった今日の釣りで、鼻息も荒く喋っている。それにいつものことながら、蒲戸の籠に入っているグルクンは、腸はらわたを抉り海水で洗つてある。体長が五、六寸で二十数匹のグルクンはすぐ料理できるようにしてあつた。それは蒲戸の釣りに対する心意気で、出来るだけ料理する者に負担をかけない優しい心遣いであった。

「ねー、蒲戸。漫湖はよくグルクンが釣れるんだ」

「アカチラで」

「えつ、漫湖じゃないのか？」

「うん」

今、二人の帰つてきた道は漫湖からである。アカチラは反対の方角である。いぶか詫る次良に、「そこが狙い目なんだね」と、蒲戸は見栄を切る。

「狙い目？ どういうこと？」

グルクンは砂地の浅い表層にいる。漫湖は国場川の泥土の堆積である。泥土にはグルクンがいない。そんなことさえ知らないかと云つた氣色で、「素人だな、魚釣りに関しては」

と、軽侮した嗤いで応えていた。その嗤いに耐えながら次良は以前に蒲戸が、

(明方や夕方の凧で、満ち潮にアカチラに行けばグルクンは素人にもよく釣れる魚である)と、云つていたのを想いだしていた。その醍醐味は、餌の量だけ釣れると云つていた。だが、魚釣りは身分の卑しい者の職業である。

(俺は士族だ)

次良の自尊心が釣りを許さなかつた。蒲戸の軽侮した嗤いに次良は複雑な心境のまま亦、弟に声を掛けた。

「ね、蒲戸。楽しいんだね、魚釣りが……」

「単純だが、魚との知恵比べなのさ」

確かに長閑で楽しいかも知れない。でも、その労力をちょっとでも勉強に廻しさえすれば、こんなに勉強嫌いにならないものをと、蒲戸の行く末を案ずる次良だが今は、

「勉強しろ」

とは云えなかつた。云うと喧嘩になるのが分かつてゐる。

三人は、いつしか久米邑に続く丘陵を歩いていた。丘陵は棚田になつてゐる。棚田は水で満たされ月明りを反射して明るい。やや暗くなつてゐるところが農道になる。三人は棚田に足を踏み入れないように農道を選んで歩いていた。月夜の大道は人影がない。なんとなくもの侘しく、唇が寒

くなつた次良は、

「沙蚕は充分あるの？」

と、悠々と先に行く蒲戸に遠慮がちに尋ねた。

「うん、この箱の中にたんとあるよ。泥土の中にな」

蒲戸の両手は餌箱と竹竿で塞がっている。

「重たいだろう？」

次良は手を差し出し、蒲戸の肩に掛けてある沙蚕の入った箱を持とうとした。一尺四方の箱に穴を開けて、穴に繩を通した餌箱の繩紐を奪うように引っ張ると、

「いいよ」

と、蒲戸は拒否した。重たくても自分の仕事道具はまかり間違っても他人に預けたり、渡したりしてはならないのだ。これが仕事人であり、蒲戸は魚釣りの仕事人だと自負していた。

「でも、重たいでしよう？」

「いいよ、良いって云つてるの！」

「あつ、そう。それならば手伝わないけど」

「誰も、手伝つて欲しいなんて、云つてやしないよ」

ちよつと罰悪く感じた次良だが、相手は弟である。たごな 窒めるように、

「ねえー、加真や他妻等はいつも一緒なの？」

「そうだよ。それに思戸金もね」

「そう、いつもそうしてね。独りだけで釣りをしないでね」

「どうして？」

「危ないでしょ。独りだつたら、怪我したときに、助けを呼びに行く者がいないからよ」

蒲戸の友人である他妻は、親父のサバニ（小舟）を借りる相談が出来ると、蒲戸にも声を掛けてくれた。その時は、垣花（かきのはな）（小禄間切りの地名）の沖でチンイユー（黒鯛）を狙う。だから、サバニにはいつも四、五人の者が乗っていた。この沖釣りで垣花の加真や松と鍋なべが釣り仲間となつた。好きな海と仲の良い釣り友達だったのである。

「怪我なんかするかい！ 僕達は……僕達は海の子だぜ。今日のようなアカチラでの釣りは、魚釣と云わないよ。サバニで沖に出てチンイユー（黒鯛の一種）を釣ることをいうのさ」

「砂場も満ち潮は恐いよ」

「分かってるつて。うるさいなー。いつも潮目と相談しているんだから……」

釣りに夢中になつていると、満ち潮に取り囲まれておることさえ眼中になく、よく溺死する嘶を聞く。そんな事例を再三聞いている次良は、一人で釣りに出ないで欲しいと願つても、魚は満ち潮時に動くらしい。

（困つたものだ）

次良は思案しながら、夕暮れの久米邑大道くじんだうふみちを二人の後について歩いていた。次良には蒲戸を案ずる理由があつた。自分は妾の子だつたのである。

蒲戸は父、蔡鐸の正妻である真呂端の三十七歳のときの子だつた。真呂端は十七歳で結婚し、すぐ長女を儲けたが、その後、十数年も妊娠しなかつた。跡継ぎが欲しい、と云つてくれない夫の蔡鐸が不憫に思えた真呂端は思い余つて、

〔妾を捨てて嫡子を〕

と、再三願い出た。だが、夫は嗤うだけで決まって娘婿の、

〔国吉親雲べーちゃん（役職名。病弱で三十五歳で死亡）〕を、後継ぎにすればいいだけのことじゃないか」と、云うのだった。実は蔡鐸自身養嗣子だつたのである。それ故、真呂端の言葉を聞き流していた。ところが、

〔それでは由緒ある蔡家の面目がたちません〕
と、反論する真呂端に、